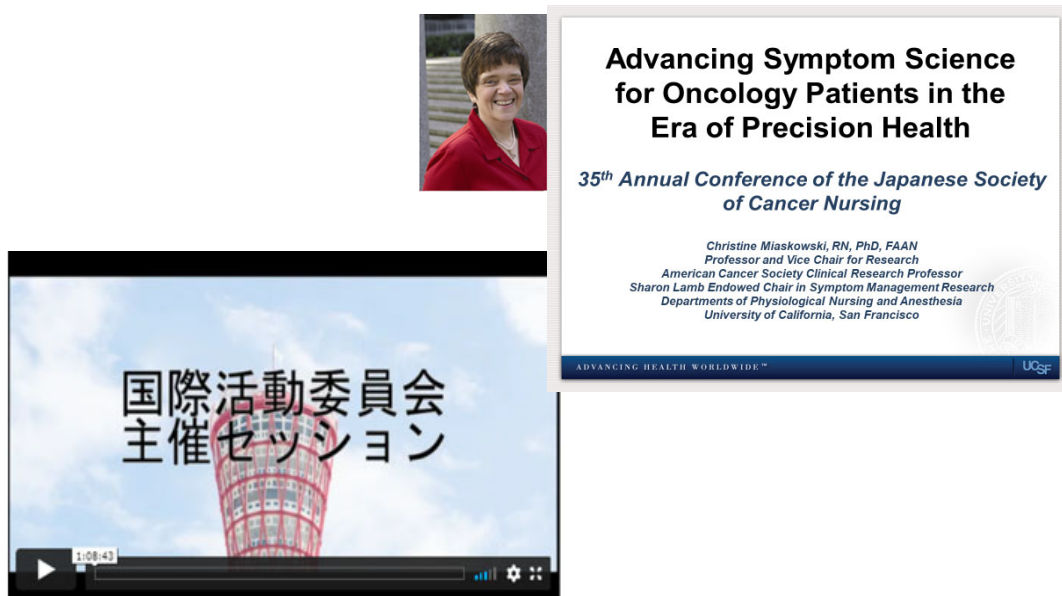


第 35 回学術集会 国際活動委員会主催セッション

テーマ「Advancing Symptom Science for Oncology Patients in the Era of Precision Health」



*スクリーンショットは企画委員会事務局の許可を得て特別に行っています。

第 35 回日本がん看護学会学術集会において「Advancing Symptom Science for Oncology Patients in the Era of Precision Health（プレジジョン・ヘルス時代におけるがん患者のための症状科学の進歩）」をテーマに国際活動委員会主催セッションを開催しました（2021年2月27日から4月30日までWeb配信）。本セッションでは Christine Miaskowski 先生（University of California, San Francisco）を講師にお招きし、がん治療に伴う症状の個別性予測におけるゲノム情報の活用についてご講演いただきました。Miaskowski 先生は看護学研究者としてゲノム情報に基づく症状マネジメントの研究に取り組んでおられる第一人者です。米国ではがん治療に伴う症状の発現に関連するゲノム情報を探索する研究が進められており、看護分野でもゲノム情報が活用されています。その取り組みは大変先進的であると感じた一方、患者の症状体験を理解して看護実践を展開するという試みはこれまでと変わらない看護の姿であるとも思いました。ご講演の中では実際の研究成果に基づいて若年者、全身状態の悪い患者、併存疾患のある患者などにはより注意を払って症状体験を聴いてほしいとメッセージが伝えられました。また、個別性のある症状科学を発展させていくために、私たち看護師が日頃から収集している症状に関する情報を失わないでほしい（電子カルテへの登録など分析できるように記録してほしい）とも強調されていました。アンケートにお答えくださった参加者の方々からは「日本でもこうした研究を行なっていく必要があると感じた」「ゲノムに関する学習を深めていく必要性が高まった」などの感想が寄せられました。